

Short Story & Poem

眠る傍ら



恋詩 Vol. 1

つたの 栞

I NEED YOU

あなたを知らなければ良かった
あなたに触れなければ良かった
影になったあなたは冷た過ぎて ひとりになった未来をも凍って見せる
影でも追わずにいられない ひとりで歩く理由が他に見つからない

あなたが 欲しいだけ
あなたを 失いたくないだけ
必要なの 知人としてでも
大切なの いつか逢える喜びが

青い惑星に存在する中から あなたひとりを見つけ出した
今となっては奇跡的な出逢いが 私の誇り

だから

あなたを忘れたいとは どうしても想えない
忘れようとは想わない

あなたを知ってしまった 私のために

黒風白雨

激しい風が黒

にわか雨が白

ふたつが並ぶと 黒風白雨

今日みたいに激しく強い風雨のこと。

ほら 窓の外を 見て

あなたが 他の女性と話してる時の

私の気持ち そのまま

蝉

抜け終えた身体は 乾いた殻

しがみつく姿 泣き続ける日々

短い時の果て 木々は静寂を迎える

落とした葉すら 新芽の養分と変えて

あなたと別れてしまったなら私は

蝉になるだろうか 木々となるのか

数

言の葉よりも声を乞う
愛を語って 吐息と混ぜて

宝石も花も
数えられる存在なんて 要らない

あなただけ

あなたが すべて

あなたが 私の なんにもかも

あなたの温もりには 代えられない

negative

私？マイナス思考。

「私なんか」
そう言う度に 彼に怒られた

恋人は良い女でいて欲しい
卑下するぐらいなら自分を磨け

それは 導きのように見えて
本当は 私を自分の好みにしたかっただけ
卑下じゃなく 遠慮だろうとあなたは 許さない

ねえ
あなたには 軽々と持ち上げられる宝石でも
私は 眩しくて触れられない
あなたの目に映る蝶が 私には蛾に見える

このままの私を 何故認めてくれないの

あなたは太陽 育てようとする力を振るうけど
私は 今あるものを惜しみながら
たまに過去を懐かしむ星屑の光でいたい

だから哀しい思い出にも囚われがちだけど
救ってくれるのは太陽じゃない

穏やかに癒そうとする時間
風に吹かれる些細な砂で出来た時計 ひとつでいい

価値観の違い

取り払い切れない陰と陽の相性

言わせてもらうけど

大嫌い

嫉妬と僻みの

澱(よど)んだ目

予感

傷つけあう為に出逢った

セロファン越しに 声が 視界が 四方に屈折して 痛さしか残らない

こんなに愛しいのに 重ならない

絡メル指ト指 体内ヲ駆ケル熱サモ

スベテノ時間ヲ埋メハ シナイ

やがて来る別れの瞬間の為に今を投じる

ひとりじゃない温度に くすぐられて

傷が 涙を流し続けようとも

うつつの夜

ふたりよりも、ひとりでいる方が眠れない日が多いなんて 想像した事もなかった
毛布を頭からかぶっても 孤独に頭を 背中を撫でられて寒い
ふたりで過ごした時間が 笑い声が
子守唄のように 耳に過ぎる

なによりも 今の君を想うと余計に眠れなくなる。

幸せに 笑っているだろうか

Love Bites

毒林檎を頂戴

それからKissして 私を逃して

この硝子の棺は

壊してしまうと突き刺さるから

この歪んだ 街から私達は走り出す

転がる毒林檎の 後を追って

導き

気付いたら彷徨っていた世界

足許のゆるい大地が 私を呑みこもうとする

びしゃびしゃと 涙に濡れてぬかるんだ路なき湿原

手を差し伸べて

ココヘオイデ

言われるだけでは駄目

コッチダヨ

教えてもらおうと分からない

だから 連れて行って

だから 君を連れ去って

汚そう すべてを

君を抱くために

魂の内までは誰にも汚せない

君を想う限り

見知らぬ湿った草原を歩く ふたり

擦れ違わないように 同じ方向へと

離れないように 手を繋いで

夏籠り

蒸す風は 払えぬ記憶の欠片にも似て

息苦しく纏う

雨が

止んでも

Fire and Flames

炎よりも熱い 風に吹かれる

其の炎よりも 僕の心は 君を焦がす

骨の髄まで 心の根まで

魂の細胞までも

Tonight

いつも心を両手で包んで 髪で私を撫でる

あなたこそが 私の天使

翼なんていらないでしょう？

天に住まう神よりも

地上を這う私を愛して

ここは天国だと いつか あなたに言わせてあげる

私も あなたの天使になってみせるから

嘆きの証

この哀しさは どうしたら表現できる？

雨に打ちつけられて 悲しみを 涙よりも激しく身体から滴らす？

燃え盛る炎の中を通り過ぎる？

この狂おしさには敵わないのだと...

愛された身に傷を付け 心の痛みを露わにしつつ流し出す

紅色の私は

新鮮だろうか？

だから...？

何だというのだろうか...

あなたは見ても いないのに

証そうとするほど あなたの瞳は 私から

背けられてしまう だけなのに

冷たい風の中

風の頼りに 耳を澄まして
過ぎた日々が あたためられた

あれから

きみは

幸せなんだね

鼓動

秒針の音だけが響く部屋の中で 私はあなたを待ちわびる

あなたの進む一步一步が 安全であるように願って

あなたの吸う大気が 清浄であるように祈って

まだ午前中なのに 手につかないほど 願いが止まない

祈りを妨げるものがあつたなら 私も容赦したりしない

すべてをかけて壊すだろう かならず

待ちわびる私を裏切つたなら 神様だって許さない

お願い時計を止めないで 私を鬼に化えないで

秒針の音

近づく足音

...あなたの吐息

雨の悪戯

残業終わった？私もよ

ねえ 傘を受け取って

一緒に持って駅まで帰りましょう

雨の中の外灯の光は ぼやけて不気味

傘を低めにして顔を隠して 頬を寄せたら

もう お互いしか見えない

壁に添って歩くの 安全で...なにより誰もここに飛び込んでこない

立ち止まったら 通行人に変に思われる

あ ほら 傘に小さな穴が開いてる

今 雨が飛び込んで 私のこっちの頬から顎下を撫でた

つい.....って ね？

雫の後を追った あなたの指先がゆるやかに肌の上を滑る

顎に届いた指へと頷いて 唇でつまむと

指が退き 唇に変わった

歩みを止めた傘の柄を ふたつの身体が巻き込む

ひと雫の雨の 悪戯が

恋人達に 火を つけた

愛を想う

やさしくしてあげる

あたたかな大気を集めて包んであげる

見返りを期待できるほど

あなたが強くないことなんて わかっているから

なにも求められない世界で

翼をやすめてくれればそれでいい

ゆっくりと

あいするひと

短歌

愛戻す 為なら私を 引き裂いて
すべてをあなたの 好みに変えたい

クリスマスソング

風が吹く空が 好き

雲に誘われ 歩が進むから

沈黙の夜空が 好き

あの頃の曲を

あの夜と同じ

あの月が奏でたりしたら

今 堕ちそうな涙が

星の数を

越えて しまう

In and Out

やっと逢えたのね 私を見つめる優しい瞳に

身体を巻きつけると ふわふわと舞い上がる心地になる

きっと雲の中よりも あなたの胸は呼吸をしやすい

墮ちる私の身体を 嘘で支えるあなた

他の女性の部屋の扉を 押し開ける腕に口づけ

表と裏 嘘を使い分けるつもりでもお見通し

あなたが誰を選ぼうと 後悔できない

私はあなたを選んだ それが真実

眠れる卵

僕は卵から生まれたばかりの つたない愛を抱えて

君が眠る卵を 見守ってる

まだ柔らかい胸の中の愛は 熱く

夢見る卵の 目覚めを待ってる

僕等の出会いは偶然だけど うまれた心は冷えないまま

初めての気持ちに 気付いた刹那 僕もおなじく驚いた

時の螺旋 見えない未来に怯えないで

目覚めた君を あたため続ける

運命が2つに別れても 忘れない温もりをあげたい

揺り籠ならここにあるから 殻より僕の腕を選んでほしい

限りあろうと 卵の外の世界で

ふたり 夢見よう

お隣の芝生

もう子供じゃないのに まだ続いでる欲しがり屋

影を 影を あなたの後姿を 私は追っている

踏んだ影は あなたの歩調に合わせて

するりと 逃れる

胸が 肌が 焼き切れそうに痛み 私は足を止める

家路に急ぐ影は あなたよりも先へと伸びているから

※* *※

家庭持ちへの片思いを想定(/ω\)。

いつときの風でも . . .

微かにそよぐ 向かい風

真夏は心地良かったけれど 今だけは止んでほしい

早く

あの胸に飛び込みたい

朝イチのゆううつ

今日は起きたくなかった

もう一度眠っても 無駄だと知ってるから

ただ ベッドの上で切なさに胸を締め付けられていた

目覚めて抱いていたのは毛布

どうりで

あの人をいくら抱きしめても

物足りなかったわけだ

Kissは 優しかったけど

毛布を抱きしめて唇をこすっても

もう

あの人じゃなかった...

句・二連

そっと来て

私の背中を

抱き締めて

引き止めて

意地張ってるの

感づいて

扉

私なんかには 惜しまず笑顔を見せる

あなた

あなたの優しさが哀しくなって

あなたの声が苦しくなって

扉を閉じて 締め出した。

ノックなんて しないで

開けてしまったら

私は もう

あなたなしでは

いられなくなる……。

縁

恋祈願

見上げた星は

流れ星

遠い思い出

あなたと出逢った
それから私は 私を見つけた

私の 可愛いところ

私の 卑下しすぎるところ

私の 意地っ張りなところ

あなたに 向かい合うために

私は 私をみつめて

あなたと 歩くために

私はもっと なりたい私に近づく

私のことを好きな 私にさせてくれた

きっと ずっと あなたが良い。

あなたと歩けなくなっても

私は あなたを好きなまま

私の為に歩いて 約束出来るの

しつもん

愛語る

君を信じて

いいですか

▼クリックが励みになります▼ (1日一回有効)



アルファポリス
Webコンテンツ